

## <安田賞>2017年度社会学部優秀論文賞（安田賞）講評

著者	野波 寛
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	129
ページ	95-97
発行年	2018-10-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00027392">http://hdl.handle.net/10236/00027392</a>

## 2017年度 社会学部優秀論文賞（安田賞）講評

選考委員代表 野 波 寛

2017年度に安田賞候補論文として推薦された卒業論文は10篇、例年よりも多い数で、「豊作」と言える嬉しい状況でした。これらについて5名の選考委員が審査を行い、最優秀論文1篇、優秀論文3篇を選びました。

最優秀論文となったのは地道さん（古川ゼミ）の『「所有関係」の社会史—入浜権が問うもの—』で、本文だけで86ページ、10万字を超える読み応えたっぷりの論文でした。環境社会学における重要なコアであるコモンズ論を土台として、自然環境という資源を「誰が所有すべきか」を問い、近代資本主義において最も一般的かつ強固な所有形態である私的所有に対する「総所有」の発生経緯とその意義を、「入浜権」をキーワードとする膨大な文献研究によって裏づける、という内容になっています。

環境社会学におけるコモンズ論は、「自然は誰のものか」という問いかけをひとつの根源とするものですが、「誰のものか」を問いかけるにあたっては、まず「所有」という概念やそれを裏づける制度、権利などの定義と発生経緯、概念整理といった作業が必要になり、さらに続いては「コモンズ」なる概念の定義と整理が必要になります。地道さんの論文もそこから始まっており、論文づくりに際して理論的にきっちり常道を踏んだ内容となっていることが、まず評価できます。論文を書く際に論文づくりの常道を踏む——あたりまえと思われるかもしれませんが、そのあたりまえのことを「卒業論文」できちんとこなす丹念さは、執筆者の高い動機づけと目的意識がなければなかなか発揮できることではありません。

ここからスタートした地道さんの論考は、古代から近代までの日本における所有関係の概略を語り、戦後の公害問題を契機とした兵庫県高砂市における「入浜権」の発生、その理念や目的、権利としての整備に至るまでの過程を描出して行きます。資料の縦横な引用によって自己の論考を緻密に裏づけていくスタイルは、すでに立派な環境社会学の論文スタイルそのものです。これほどの資料を読みこむのにどれだけの時間と手間をかけたのか、ひとつひとつの記述は卒業論文とは思えないほど丹念なものであり、多くの委員から高く評価されました。

続いて、優秀論文に選ばれたのは志水さん（清水ゼミ）の『社会経済的地位と怒り表出のメカニズム』です。社会心理学をベースとする実験論文であり、公的・私的場面における情動（怒り）の表出と社会経済的地位（年収・学歴・職業）との関連を、WEB調査で収集したおよそ600名分のデータから明らかにした内容となっています。文献研究と異なり実証研究なので、ボリュームとしては本文22ページとコンパクトですが、緻密なデータ分析と、分析結果をもとに明快な結論を引き出すという、これもまた実証研究としての常道を踏んだ手順がきっちりとられています。社会心理学における近年のトレンド的分析方法である構造方程式モデリングも用いているのは、なかなか見事というべきでしょう。結果として、「社会経済的地位が高いほど、心理的な特権意識を媒介として、怒りが表出されやすい」という仮説の証明に成功しています。先行研究を渉猟して理論的な裏づけをとった仮説の構築、それを検証するための調査計画の立案、データ収集と的確な分析、そして分析結果をもとにした仮説の検証と、実証研究を進めるお手本ともいえるべき正確な手順には感心しきりでした。

もうひとつの優秀論文は、織田さん（三浦ゼミ）の『生の戦略としてのトランスジェンダーの埋没——出生時に女性として割り当てられたトランスジェンダーたちのリアリティ——』。インタビュー調査と自分史の語りという2つの手法を併用して、「一枚岩のトランスジェンダーのイメージを壊し」、「多種多様で、日常の非常に細かい問題」、「当事者だけが自分の中で抱え込まざるを得ない問題や葛藤」を描き出そ

うとした、手法も記述もやや混とんとしながらもそこから立ちのぼって来る生々しい何か、マイノリティという単純な言葉だけでくられがちで、しかし決してそんな単一のカテゴリーだけでは収めることのできない一人一人の生の重さといったようなものを感じさせる、意欲作とも表現できる内容です。自身もトランスジェンダーではないかという自覚と不安をかかえながら生きてきた筆者は、「同じトランスジェンダー当事者に聞くのだから問題をきちっと理解できるだろう」と思っていたのに、いざ他のトランスジェンダーの方の話を聞くと、その「問題」が自分にとっては「いまいच्छりこない」……という経験をしてしまう。そこから筆者ならではの自分史の語りが始まるわけですが、はなはだ逆説的ながら、同じトランスジェンダーの当事者だからこそわかりあえるはず、なのにそうではなかった、それをきっかけとしてトランスジェンダーたちのリアリティが一枚岩ではないという気づきに踏み入っていくこの過程こそ、まさに当事者でなければたどることのできない知的道程なのではないでしょうか。インタビューと、その結果を踏まえての自分史の語り、この2つを交互にはさみながらトランスジェンダーならではのアイデンティティに対する論考を訥々と語り深めていく記述は、非常に示唆に富んだものでした。

最後の優秀論文は、渡壁さん（今井ゼミ）の『広島はヒロシマにどのように向き合ってきたのか——ヒロシマに関する行事と「生者-死者」の関係性について——』です。驚いたのは、1955年や2017年といった各年に実施された平和行事の一覧表を含め、参考文献リストだけで20ページを超えようという膨大かつ濃密な資料の一覧とその引用。多くがネット上での資料検索とはいえ、これだけの資料と文献をたたき台に論考を進める作業には相当な知的体力を要するはずで、その圧倒的な情熱とエネルギーには脱帽ものです。広島は、被爆の地ヒロシマになるという出来事を自らどのように語り伝えてきたのか。「語り得ない出来事」をどのように継承し、向き合ってきたのか。この問題について上記のような膨大な資料を引用しつつ論考を進めるのが、この論文の骨子となっています。原爆犠牲者供養式、慰霊祭、原爆〇周年記念大法要、平和大行進、そして最も近くでは「この世界の片隅に」ロケ MAP……こうした平和行事は過去現在未来のいずれを志向し、また生者・死者のいずれに対してどのように向き合っているのか、時代に沿ったその位相の推移が丹念に描出されていきます。資料的価値も高い労作と言えます。

これら受賞論文以外の6篇も、卒業論文ゆえの粗削りな点は散見されますが、自らの知的好奇心を原動力として対象へぶつかっていった個性豊かな考察は、いずれも受賞論文に勝るとも劣らぬ面白いものでした。それぞれの筆者と、ご指導にあたられたゼミ担当教員の方々に敬意を表し、2017年度安田賞の講評とさせていただきます。

最優秀論文	卒業論文名
地道 優樹 (古川彰ゼミ)	「所有関係」の社会史 ——入浜権が問うもの——
優秀論文	卒業論文名
志水 裕美 (清水裕士ゼミ)	社会経済的地位と怒り表出のメカニズム
織田 佳晃 (三浦耕吉郎ゼミ)	生の戦略としてのトランスジェンダーの埋没 ～出生時に女性として割り当てられたトランスジェンダーたちのリアリティ～
渡壁 晃 (今井信雄ゼミ)	広島はヒロシマにどのように向き合ってきたのか ——ヒロシマに関する行事と「生者-死者」の関係性について——
上記以外の推薦論文	卒業論文名
小松原 百香 岡本 奈子 (吉田寿夫ゼミ)	高学年の児童を対象とした他者に配慮した言動を促すための授業案の構築
藤原 和香 (島村恭則ゼミ)	カワコ伝承と「福河童大明神」 ——隠岐の島町西郷の事例——
乙見 知花 (村田泰子ゼミ)	子どもの貧困とネグレクトの関連性から考える現代家族への支援 ——親の就労と子どもの育ちを保障する場としての夜間保育所での調査から——
加藤 さくら (鈴木謙介ゼミ)	コミュニティ意識から見るまちづくり ～兵庫県加古郡稲美町を例に～
北川 茉里奈 (稲増一憲ゼミ)	メディアの中の他者の意見 ——なぜ報道番組においてコメンテーター・エグゼンプラーが重宝されるのか——
前田 恒平 (関根康正ゼミ)	生徒は体罰をどのようにとらえたか ——言葉よりも軽い体罰、〈特殊-一般〉軸と〈単独-普遍〉軸を主軸においた考察——